

第3章 久慈川の洪水と治水

(1) 治水の歴史

久慈川において発生した水害の歴史を見ると、宝永元年(1704)の氾濫が記録の上では最も古い。久慈川は昔から幾度となく水害がおこり、流域には大きな被害が発生している。記録に残っているだけでも、江戸時代の天明6年(1786)から100回の水害が起こっている。洪水との闘いには、幾多の普請や工夫がなされ、地先毎に小規模な治水対策が行われてきた。久慈川の抜本的な治水対策は、昭和13年に国の直轄事業としてはじめられた。

1) 江戸時代

久慈川の沿川の平地は水戸藩穀倉地帯として開けたが、度重なる洪水により多くの被害を受けている。記録にあるものでは宝永元年(1704)が最も古い洪水であるが、表3-1に示す江戸時代の洪水の中でも大きな被害をもたらしたものとしては、天明6年(1786)、天保4年(1833)、元治元年(1864)等の洪水を挙げる事が出来る。この中でも天明6年、天保4年は大洪水による被害に追い討ちをかけるように冷害となり、農作物の不作により多くの餓死者が出て、悲惨を極めた。

この時代には、利水の面では堰や灌漑用水路の建設などに進展がみられたが、治水の面では、水害防備のための竹林の造成、地先での小規模な治水対策と水屋など各戸における自己防衛策が主体であった。

表 3-1 江戸時代の主な水害

年月(西暦)	被害状況
宝永元年6 (1704)	茅根堰江下崩壊。同年7.5再び大洪水あり。46,000石の損害。
享保13.9.6 (1728)	久慈川、里川大洪水
享保15 (1730)	大風水害
宝暦4.7 (1754)	大暴風雨、倒屋6~70件
宝暦7.5 (1757)	大洪水
宝暦10.8.2 (1760)	大洪水
安永元年 (1772)	大暴風雨
安永8.8 (1779)	大洪水
安永9.7 (1780)	大洪水
天明3.6.18 (1783)	大洪水
天明5 (1785)	大洪水
天明6.7.19 (1786)	新宿床上5~6尺。留、北河原、児島、竹河原、茂宮等の村々水嵩3尺~8尺。額田大池土手決壊。久慈川筋水際土手数10カ所破堤。
享和元年7 (1801)	大洪水
享和3 (1803)	大洪水
文政4 (1821)	大洪水
文政7.8 (1824)	大洪水
天保4.8.1 (1833)	潰家1,643棟。半潰家3,740棟。即死怪我人81人。田畑流出139,830石余。
天保6 (1835)	大洪水
元治元年8.9 (1864)	久慈川沿岸、里川、浅川、山田川等大氾濫。農作物大被害。
慶応2.8.8 (1866)	大洪水

注：印は大洪水と伝えられている洪水

久慈川の水害防備林

現在の日立市留橋のあたりから矢祭町高野付近にかけての兩岸には、12ヶ所の水害防備林としての竹林がある。起源は明らかではないが、江戸時代より竹林は水戸藩によって「御立山^{おたてやま}」として保護されてきた。現在はほとんどが民有地となっており、組合組織によって管理されている。水害防備林は水流が強く当たる部分や本流と支流の合流点付近に主に分布している。その役割は低水河岸の防護、堤防への水当たりの減勢、氾濫原への土砂流入の抑制を目的としている。



辰ノ口水害防備林(常陸大宮市, 旧大宮町)

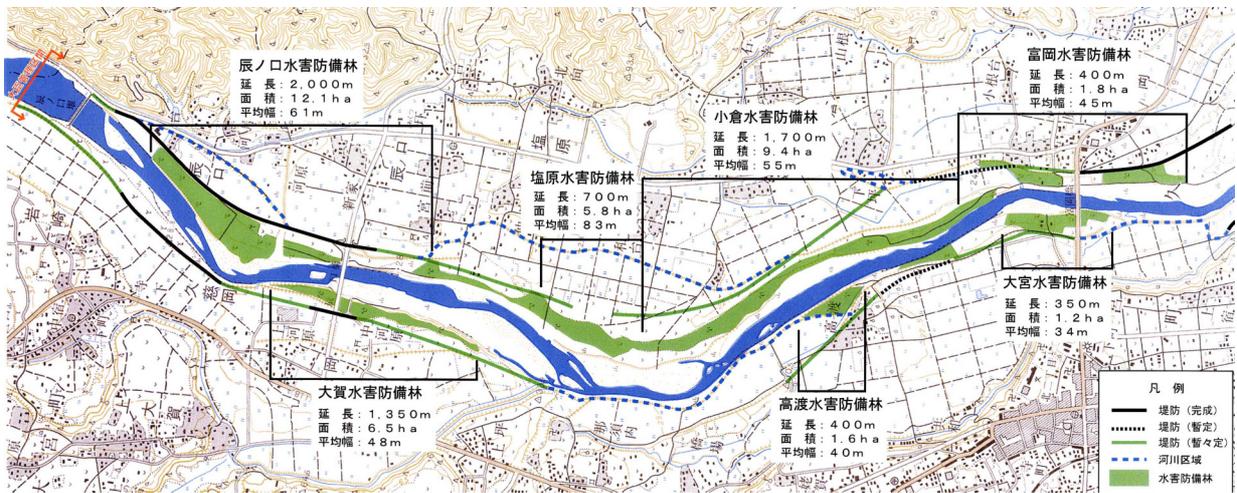


図 3-1 富岡橋から辰ノ口堰に至る水害防備林分布位置図

江戸時代に築造されたとされる堤防

東海村^{かめした} 亀下^{たけがわら}地区は洪水常習地帯だった。竹瓦地区の集落(西側)には、現在でも旧河道(蛇行)に沿って江戸時代に築造されたとされる堤防が残されている。

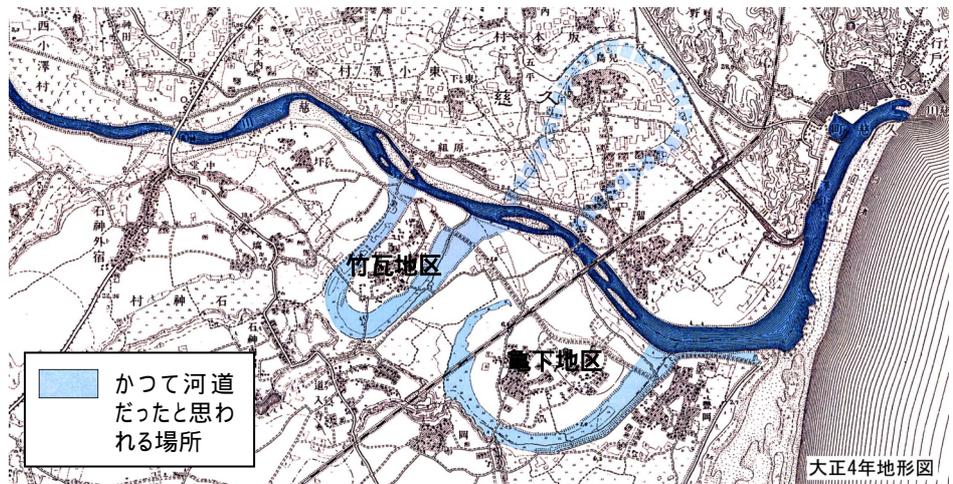


図 3-2 かつて河道だったと推察される場所